



ABCアナウンサー
堀江政生の

Sinfonia
Hour



シンフォニア・アワー

クラシックの意外な裏話や、ザ・シンフォニーホールにまつわる話など、
ここだけのとっておきエピソードをご紹介します。

vol.3 宿命～私は泣きに行きます！

この原稿を書くにあたって、また映画「砂の器」のDVDをレンタルしました。また泣きました。号泣です。もしかしたら、泣くために借りたのかもしれないと思うくらいです。そして、もうひとつ目的がありました。映画の中に流れるピアノ協奏曲『宿命』をまた聴きたかったのです。続けて「また」と書いたのは、こんなこと2度や3度ではないからです。そもそも私はこの映画のVHSテープを持っているのです。今では再生するデッキがないため、ことあるごとにDVDをレンタルしているというわけです。

昭和49年に公開され大ヒットした松竹映画「砂の器」。当時小学生だった私が初めて観たのは、リバイバルで上映された5年後、中学3年生でした。映画や小説が好きだった友人たちと横浜の映画館へ。それが最初の号泣です。女子もいましたが、お構いなしに泣きました。

病気のため故郷を捨てなければならなかった父と子の遍路の旅。四季の移ろいの中を歩く二人のシーンをピアノ協奏曲『宿命』が支えています。スクリーンに映し出される日本の原風景。野宿旅の二人にとって自然は厳しい。しかし、それより厳しいものは、人々の病に対する偏見と差別でした。その中で二人の愛情はさらに深くなっていく。だが哀しいかな、二人は別れなければならない。すべてが宿命…

何度観ても、出雲の小さな駅のホームで、二度と会えない父と子が抱きしめあう場面に、あふれる涙をこらえることができません。そして気付くのです。中学生だった時分は、子としての立場で泣き、親となったら、父の立場で泣いていることに。そして、後者のほうが何倍もつらいということに…

このたび、西本智実さん指揮、外山啓介さんのピアノ、日本センチュリー交響楽団で、菅野光亮さん作曲、ピアノと管弦楽のための組曲『宿命』が演奏されます。おそらく、このシーンが目の奥によみがえり、泣いてしまうでしょう。いや、泣きに行くのです。

いま手元に、中学生の時に買ったパンフレットがあります。そこで音楽監督の芥川也寸志さんは、「この曲は映画音楽として良く出来ているだけでなく、独立した演奏会用としても鑑賞に値する作品だ」と語っています。

私は、ピアノ協奏曲『宿命』は、単に「主題曲」「挿入曲」などというレベルではなく、この映画の主演であると感じているのです。

6月22日の直前に、また「砂の器」を観ている私がいるような気がしています。そして、当日客席で嗚咽している私を許してください。

公演の聴きどころ、豪華ゲストを招いてのお話など、名曲とともにご紹介！



堀江政生のザ・シンフォニーホール・アワー

ABCアナウンサー堀江政生が、豊富なクラシックの知識を余すところなく語る30分。

1008 ABC Radio

毎週日曜日
あさ7時5分～7時35分